

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
ふじしろ 藤城 正美	男 性	19 歳	蒲 郡 市 (渥美郡田原町)

「開拓団からシベリア収容所へ」

「東三河郷開拓団からの手紙」より

(部分修正)

○ 東三河郷開拓団入団

昭和18年3月、私は東三河郷開拓団に入団しました。当時17歳で、田原町白谷実業補修学校を卒業したばかりでした。当地へ行ってびっくり、ただただ広いのですが、電気も便所もなく、水を飲むこともできません。水を飲むと、すぐ下痢になるからです。どこへ行くにも歩くか馬車か乗馬です。西の方に小高い丘があるだけで、町へ行くにも18里から25里、町の住民は満人ばかりで言葉もできません。東三河郷開拓団は、昭和18年入植者から1年間訓練を受けることになり、訓練所に入りました。小林宗一さんの指導で、馬の扱い、農耕、種まきなど、日曜日は洗濯をしたり乗馬をしたり満語の勉強をしました。手紙を書いたり、満人の住宅に遊びに行きました。一緒に入植した17人、愛知県の東三河から増産隊で来た12人が一緒に仕事をしました、毎年4月11日から15日頃になると土が溶け出し、種まきに入ります。小麦、大豆、とうもろこし、こうりゃんなどです。

訓練所の畑は80町歩ほどで、一番大きな畑の長さが1350mありました。除草作業は、午前中で「1うな」、午後「1うな」で1日の仕事でした。1ヶ月も過ぎると野原一面が緑になり、太陽が平野に昇り平野に入る壮大な景色です。軍歌にあるように「満目百里」とよく言ったものです。収穫時期に入ると、小麦の刈り取り、大豆、小豆、とうもろこし、各種に分けて収穫します。4頭曳きの馬車を畑へ引き入れ運搬します。出荷は南京袋へ入れ、馬車に山のよう積み上げ、18里ある東陽鎮という町まで運びます。出荷所は穀物の山で、日本人の係官と満人が整理していました。私はその穀物が、満州の日本人へ運搬されるのだと思いました。



広大な野菜畑 東三河郷開拓アルバムより

当時の学校のことを書いておきます。校長先生は、永江先生で今も元気でいます。訓練所には生徒が17、8人いたと思います。昭和18～19年にかけて新校舎を増設し、私もよく仕事に行きました。レンガ造りで8教室あった気がします。立派な学校で、私たちは青年学校で訓練をしました。話によりますと、現在

も中国の子供が勉強しているようです。学校の西側にお宮があり、お宮の前で相撲大会をやったことを覚えています。

昭和19年、私は豊石部落の田原班へ移り、田原出身者4人で農業をやり、共同生活をしました。4人は私より先輩ですが、同じ田原の学校を出ているので気持ちがかつたもの同士でした。その年、私は日本馬1頭をもらいました。その名は「金次郎」といい、農耕の仕事も良くし、乗馬でもよく走りました。その年は訓練所で覚えたことを一生懸命やり、大豊作でした。私たちの田原班には馬が4頭、満馬3頭、牛1頭、豚も6匹おりました。

○ 召集令状

昭和20年、私たち4人は1年繰り上げの兵隊検査になり、一番最初に私に召集令状が参りまして、3月に軍隊へ行きました。場所は北安の686部隊でしたが、5月に通信演習があり、黒河省（ソ連との国境にある満州最北の省）の呉郷というところへ行き、部隊名も1503部隊となりました。通信の勉強もしましたが、ソ連が攻めてきた場合に備え、毎日陣地を造り、壕掘りをしました。私は初年兵ですが、軍隊で良い経験もしました。師団司令部へ電話当番で、西森伍長、上等兵、初年兵の計15名で行きました。2週間の勤務を済ませて、今度は橋大隊へ電話と取り付けに行き、飯を腹一杯食べたことを忘れません。8月9日の夜間作業の時、朝の4時頃、突然爆音がしてソ連の飛行機が飛んできました。当番兵をしていた久保田曹長がすぐ中隊本部に連絡すると、「作業をやめて戦闘準備にかかれ。」と命令が出て、戦争になりました。山の上から眺めておると、呉郷の町へ毎日ソ連機が飛んできて爆弾を落とし、大火災です。陣地にもソ連機が低空で機銃掃射をし、緊張しました。ビビ、ドド、スパン、スパンと弾が飛んできます。中隊長が小銃で飛行機を撃てと命じます。銃の弾は遠いとピュン、ピュンと、自分の身の回りに来るときは、スパン、スパンと来ます。

8月13日、部隊には三つの兵壕が掘ってあります。中隊長が「お前はここ」と命令し、小銃の弾を180発、食糧2週間、水を各所におきまして、「ここから一足、退くでない。」「貴様等は、ここで死だ。弾のあるだけ戦え。」と、命令されました。遠くで銃声がバリバリと聞こえています。昼は飛行機が来て爆弾を落とす。本当に無我夢中でした。

8月15日の午後3時頃、中隊本部へ集まれとの命がありました。皆三つの兵壕から出ると、中隊長の訓示があり、「日本は戦争に敗れた。今後一切ソ連兵に刃向かってはならない。」その時に、久保田曹長が「藤城、この白旗を掲げてこい。」と言います。中隊本部の脇に、3人で抱えるほどの大きなナラの木がありました。2枚ほどの布と棒をよこしたので、一番上に登りまして、その白旗を掲げました。下では皆が、ガヤガヤと言っており、中隊長は日本刀を抜いて腕ほどのナラの木

を振りかぶって、「これで最後の別れ」と言っていた切っていました。兵器は一括して武器の山になりました。私は内心、これで助かったと思いました。毎日の緊張がどこかへ飛んでしまいました。

「二分隊は、橋大隊から機材を撤収してこい。」と指示がありました。初年兵4人で1升びんの底を割って、ロウソクを穴から入れ、一人が持って、撤収作業にかかりました。橋大隊へ着くと、銃声が一層激しく、隊長が貴様等は地雷が埋めてあるで十分気をつけて帰れ。」と言われました。夜中中かかって軍隊で教えてもらったように、巻き取り線を巻いて帰る途中でした。サーチライトが光りましたので、道の隅まで寄り、自動車を通そうとしました。その自動車はソ連の将校が手に拳銃を握って、銃口を向けております。そのジープが3台来て、私らは一瞬驚きましたが、そのまま素通りして行きました。



武装解除する日本兵 「母なる港舞鶴」より

兵器返納場所に着くと、兵器係の曹長が「通信機材はこちらへ持ってこい。」と言われました。山ほどある機材の中に投げるように置いて帰ろうとすると、曹長が「ご苦労、貴様等、各自の物を持って111部隊へ行け。」と言いました。その時、東の空が薄明るくなっておりました。111部隊の衛門には、ソ連兵が立っており、仕物点検をしております。そこで、腕時計、万年筆を取られてしまいました。中隊の者等と一緒にになりましたが、その時は「捕虜」とは思いませんでした。

○ 収容所を転々と

昭和20年9月1日、私は清水中隊に編入になり、2日、当地を午前6時に出発しました。そして北へ行軍、午後3時頃に大きな川へ出ました。国境の「黒竜江」、ソ連でいう「アムール川」で川幅が600mもありました。その夜は川の辺りで寝ました。3日、ソ連領に入りました。どこを歩いたか分かりません。一夜野営をし、4日目はトラックに乗せられ、着いたところが国営農場、収容所、所長の訓示があり、その訓示の話で、「お前たちは捕虜だ。」と言われ、悲しくなりましたが、仕方がない、今度は生きることを考えました。毎日、朝は5時起床、7時作業、馬鈴薯掘り、飯は「おかゆ」が茶わん2杯ほど、スープ「おわん2杯」、中にはロシア漬けのキャベツ少々、昼は黒パン300g、それにスープで朝といっしょ、夜飯も朝といっしょでした。仕事がとてもきつく、「早くやれ」ロシア語で「ダワイ、ダワイ」とけしたてられました。

そんな生活を1年5ヶ月し、今度は地名が「ワジヤイフカ」という所でレンガ工場での作業、レンガの焼きたてのをトロッコに積んで外へ出すことです。冬は

よいですが、夏は熱くてたまりません。毎日の労働がきつく、食べるものも少なくフラフラでした。誰^{だれ}を見ても冬は白くなり、目ばかりぎよろぎよろして本当に倒^{たお}れる手前です。冬は寒くて零下50度にもなり、冷たいというより手足が痛いです。満州の寒さは問題にならないほどです。

昭和22年10月頃、今度はタイブウシュフカという地名の収容所に製粉工場、発電所の仕事にも行きました。ある時、私が交通事故に遭^あいまして、入院しました。1ヶ月ほどで退院したところ、収容所に置いていった私の荷物を豊川に住^かんでおります酒井茂君^{さかい しげる}が、藤城は事故で死んだと言って、本隊と一緒に収容所を替^かわっていったそうです。私の荷物は何もなく、身につけているものだけになりました。

23年1月、ブラゴエチェンクスというアムール川ほとり収容所に替^かわり、その時初めて汽車に乗りました。その収容所では造船所の仕事でした。その収容所は食べ物が高く、体力も回復しました。6月初日ナホトカを出て、27日舞鶴港^{まいづる}へ入港、29日に故郷^{こきょう}へ帰ることができました。東三河郷開拓団の人たちは一緒ではありませんでした。開拓団の人たちが大変苦勞されたことは話に聞きました。私の開拓団生活は約2年、シベリア生活3年半でした。

平成2年11月
(記録者 竹川 泰代さん)